

世界遺産への登録をめざす 武家の古都・鎌倉ニュース

第3号 平成19年(2007年)4月発行
発行 鎌倉世界遺産登録推進協議会
編集 広報部会 編集人 内海恒雄
事務局 〒248-8686 鎌倉市御成町18-10
鎌倉市世界遺産登録推進担当
Tel.0467-61-3848 Fax.0467-23-1085
E-mail: sekaiisan@city.kamakura.kanagawa.jp

市民は、自分たちの力で自分たちの街を維持する 養老孟司会長講演会「生きているまちの世界遺産」開催



養老孟司・鎌倉世界遺産登録推進協議会会長

2007年3月10日(土)、鎌倉生涯学習センターホールで、鎌倉世界遺産登録推進協議会会長である養老孟司・東京大学名誉教授の講演会「生きているまちの世界遺産」が開催されました。申し込み受付開始後数日で定員に達し、関係者は市民の関心の高さに勇気付けられました。

当日は講演に先立ち、石渡徳一・鎌倉市長が挨拶に立ちました。世界遺産暫定登録から16年の経過を語り、市民の理解と協力により世界遺産登録が実現する、と訴え、世界遺産登録をめざす活動を新たなまちづくりとして伝えていきたいと抱負を語られました。

養老先生は、ソフトでユーモアあふれる独特の語り口で講演を始められました。

「世界遺産というのは、ある意味でブランド、レッテルと言ってもいい。しかしレッテルが付こうが付くまいが、中身は変わらない」すなわち価値は普遍であることを示唆し、人々が暮らしている、生きているまちを「遺産」とすることの意味を問いかけてました。

「世界遺産を実態と考えるか、ブランドと考えるか、どちらにしてもそれを上手に使っていくことが上手な生き方」であるとし、すでに世界遺産登録されている京都の市民が伝統をどのように市民自らの手で、気負いなく守ってきたかについて、先生が館長を引き受けている『国際マンガミュージアム』の建物の例を引いてお話しされました。そこから、「市民とは、自分たちの力で自分たちのいるところを維持している人々」と定義され、今の人々があまりに行政に頼りすぎてい

ることに言及されました。

先生は幼い頃の鎌倉について、「前田侯爵別邸(現・鎌倉文学館)、旧華頂宮邸、そのほかにも別荘として建てられた洋館の多いモダンなまち」であった思い出を話され、「昔の建物はできてから段々と風情が出て住みよくなってくる。しかし今の建築は出来立てが一番良くて段々ダメになる。つまり現代の人は『時間』というものを考えない」「しかし、古都の良さは嫌でも『時間』を感じる」と述べられました。

ここで「時間には、過去と未来しかない。予定に書いてあるものはすでに現在決まっているのだから未来ではない。本当の未来は予定がない」として、「子どもの持っている未来はそれ」であるのに、「親は子どもたちの未来を、現在と過去から決めてしまおうとする」と警鐘を鳴らされました。

また20世紀の戦争が石油文明維持のため起こったことを批判し、「石油がなくても古代から文明を作ってきた。石油文明は楽だが人間を壊す方向に行っている」と、歴史から学ぶ姿勢の大切さを語られました。

そして「現在だけが中心の世界にいと、古都の歴史は嘘に聞こえる、しかし嘘ではない」として、一例として鎌倉では千体を越す人骨が発掘され、その時代と場所の特定ができるなどの事実から、過去の歴史が今につながっている認識を語られました。

「実生活の中に歴史を活かしていくのは住む人々の意思。その意思が『市民』を生む」、即ち「世界遺産にするとということは、皆さんが自分の住んでいる土地にどれくらい責任を持つか」として、世界遺産登録によって、鎌倉に住んでいる人に課せられる『世界遺産を守っていく』という責任に触れられました。そのうえで「長い目で見ると、それを自分に課してやっていくことは必要。何もしなければ楽」と語り「まちは大変な方を取るか、楽な方を取るか、大変な方を取る方がいい」として、鎌倉のまちづくりの中に、過去であり歴史であり時間である「古都」を生かしていく意義を強調されました。

最後に、登録推進協議会会長として、「今後とも世界遺産登録への理解をよろしく願います」と締めくくられ、会場は大きな拍手で沸きました。